光

第五十九輯

大正十五年十一月

◆一燈園生活について（四）……西田天香

◆薊と菊（エヂンバラ印象記）……岩橋武夫

同人　懺悔報恩の奉仕者

祈願　不二の光明によれる生活

費用　供養されたる淨財

◆論語講話……安藤州一

◆道友……松下吉衛

一燈園・宣光社

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くは常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生產業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至清規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとより言辭の形容し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

一燈園生活について

西田天香

四、祭る人 祭らるゝ人

一燈園では、いつもの事がそのまゝ佛事をしてゐる事になつてゐる筈ですが、今晩は、一燈園に因緣の佛様達をおまつりして、お供養をいたします。今日はちようど大文字が行はれるそうな、これは弘法大師が佛供養の爲に考案されたといふ事です。此夜に、こちらの生涯に因緣の深い、佛様方に皆様から回向して貰ひ、また、故人のありし日の事などを偲んでしばらくお話し申上たいと存じます。

先づ初めに、高源室毒湛禪師の事を申します。この方は私の師匠であります。私は、私のほんとの師匠は維摩居士であります。また一切衆生が導師であるともいふてゐますが、たとへ一日にもせよ獨參して、公案を頂いて、師匠としてゐたのは、南禪寺の南禪院に寂せられた毒湛禪師であります。今私がこゝに掛けてゐるラクスは、高源室から頂いたのです。一燈園では別に禮装もしないので、といつて浴衣では濟まぬ、かういふ時に、ラクスを掛けます。すると傍の人も、あれは何かだろうと落ちつ

いてくれます。高源室には、立派なお弟子が大勢居られました。私は正式にお弟子であつた譯ではない別に寺を持つつもりもないので、しかし一回でも獨參しかはいがられまた私の法喜もよく參りました。今白玉樓中にあつて、私がさゝやかながら一般社會へ波紋をつくつてゐる事を、高源室も歡んでくれる事でせう。次に網島梁川居士の事を申します。梁川さんは、病間錄や回光錄を書いて宗教界を刺戟した人で、海老名彈正さんは梁川さんの死去の時、クリスト敎からも許され、禪宗からも認められた人であつたといはれた。他宗と提携する事を好まぬクリスト敎徒からこんなにまで言はれた程勝れた人であつた。梁川さんは一燈園とは深い關係がある、西村夏子さんを連れて私が東京へ行つた時、梁川さんに逢ひました。ちようど四五人の娘さん達の集りがあつた。髮結ふ事を節してみようか、出來るだけつゝましうして、五圓のお金が出來たのです、これを銀行へ預けやうとした時、名前が要る事になりました。梁川さんは或新聞へ一燈錄といふ題で寄稿してゐられた、その一燈といふのが大變やさしく響くのでそれを貰ふて一燈園としたらどうかと思ひ梁川さんに相談すると梁川さんはたいそうよろこんで、それから一燈園といふ名が生れました。初めはこんなやうにやさしい女の人達の心の結晶に、ちよつと符牒を付けたのでした。それで一燈園とは初め婦人の集りにつけたのでありました。初の頃はすべて婦人に關する事が多かつた、梁川さんはそれで、名つけ親の樣なものであります。私との交はりは短くして一年半位かと思ひますが極親密な事でありました。回光錄へ私の事を、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

世は自ら此人を知るべしと書かれたのでした。此の生活は一面綱島梁川さんの希望を滿してゐる事であります。次に秋光淸德大姉、これは西村夏子さんで、懺悔の生活に表れた二種の婦人の一方であります。この人と許婚の間柄であつた西田又藏一燈園宣光毅法居士此の二人に就いて申し上げます。又藏といふのは私の義理の弟で農學士でした。非常にトルストイ好でしたが、或時一緒に汽車に乘りました車中で私にトルストイの事を聞かせます。話の中私は、それは違ふといゝましたら、此の書にはそう書いてあるといふのですが、やはり其の本の誤譯である事が分りました。其の時弟は、道の上から見ると夫れが、わかるものかと感じたやうな事もありました。此の二人について結婚の事を申しませう。結婚に就ては、よく混雜するものです。結婚には西洋思想のもの東洋思想のものがある。周園や親が何といふても自分の撰擇より容れぬものこれは西洋流である。また靜かにお光まかせにといふのは東洋流である。一燈園の結婚は一つの公案であります。木魚さんの話に一燈園の生活は生活それ自身が戀を滿足させてゐる。法喜、此のよろこびが、女房役をする。また亭主役にもなる。これはよく見たといふ言葉でなくして、よく體得した言葉である。私は前の妻が去つてから十年妻をもたなかつた。私は天女を妻に持つてゐるといふてゐました。襦袢を洗ふてまつてゐてくれる、着物をとゝのへてまつてゐてくれる、不自由をさせない樣にとやさしくして貰へる、縱に誰れに愛されずに横にめい／＼にあるお光に愛されました。それをつぎ合せて一人の女性と見る、純粹なものであります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

結婚を愼重に扱ふ事は、其の人を完成する事でもあります。いろ〳〵の過程を經つゝ愼重に扱ふ事はよき修養ともなります。私は又藏と夏子との中に立つて二人を結んだのであります。愛は、ほんとうの愛は肉體を放れたものとは言はぬが、また肉體が一つにならねば完成ではないと思ふ事も除りたい。かたよつてはならぬ。すると釋迦やキリストは、愛に於て半端かといふかもしれぬが、許されてゐても娑婆で肉體が一つにならぬ時もある。此の兩人は、此の世では一つにならなんだが、光を通して、一つであつた。夏子はやさしい美しい心の人でした。南禪寺の管長さんがこんな娘をつまらぬ結婚させたりしないで家にゐて淨める役をさせたらといひました。此の婦人は道に精進して來ねばならぬ理由がある。夏子の母親は、夏子がこんなに道道といふは、傍から入智慧をするからではないかと言ひましたがそうではない道に來ねばならぬ動機がある。それはその父が知れないのです。席貸家の娘で遊びに來た或る人が父となつた。母はあるが父が知れぬ世間からは妾の子よと、左右せられる。それにはあまりに魂がきよまつた。別の世界へ行きたいのは當然の事である。どこへ進めてもお嫁には行かぬといふ。母親は私が入智慧してゐるとでも思ふてゐる。それで母親がわたしが進めても行かぬから、あなたが、あれを貰ふ人を見立てゝくれといひます。私がこれを引受けねば、夏子は無理にも行く事を强制される。私は隨分苦心してそれを弟に賴んだのです。道心ありといへど氏も素性も知れぬもの、あたりまへなら、誰でも嫌ひます。私もそれには苦心致しました。こちらの注文通りにはその

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

爲に行かぬのです。或る時弟と叡山の宿院へ行つた時木影へまねいで賴みがあると言ひました。兄さんの賴みなら、何でも聞くといふて呉れられます。實は夏子を貰ふてほしいといふと暫し考へた後、條件を出した、親の許しを得るまでは精神的の結婚に止めたいといふのです。親は私の親戚でした、どうせ波瀾があらう。娘と娘のお母さんに此話をすると、それは〳〵よろこばれた、過分な話ですから隨分よろこんだもの、また又藏は隨分しつかりしてゐました。毅法居士の毅は、大山の樣な動かす事の出來ぬ、しつかりしたのを表はしたのです。一燈園の生活は超越してゐるのですから結婚の事なども、親の意の通りにしないといふのも尤もともいへるが、超越は魂だけである、魂と魂を結ぶ場合なら親の承諾がなくても出來るであらう、肉體を結ぶ事は、親の許しを得ねばならぬ、宣光は、親の許しを得てゐないから、西村の家へ行つても、貰うとも何とも言はぬそして以前と少しも變る事がない。來ても其の娘に指一本さゝず、此の娘を貰う人とは見えぬ。同人の方々も結婚に就ては、これを參考にして貰ひ度い、精神的に一つになつてゐても、此の娘を貰う人の樣な感じがせぬので、母親は心配し出した。これは僞でないかといふので、大井さんに相談して、此の問題について大井さんが宣光に話す處をかげから聞かせたりして安心させた樣なこと、夏子はその內病氣になつた。それも周圍が此の生活に了解ない爲苦しんでこんな事になつた。病氣がだん〳〵進んでもう駄目とおもはれた時、母親が最後に一度宣光に逢うてやつて貰ひたいといふのですが、夏子は、戾つて貰はいでもよろしい、こゝ

で逢ふてゐるといふのです。それを宣光に知らすと、私も歸らないでも逢ふてゐる。と同じ様な返事である。しかし母親が聞かぬので、打電したら、歸つて來ましたが病床へはなかなか行かぬ。他人と話をしてゐる。病床へ行つたら別に何にも云はず、笑つてどうですかと、靜かにたづねる、そんな風でした。娘は間もなく亡くなりました。續いて宣光も同じ病氣にかゝり、それから三年目に亡くなりました。娘の死後宣光は、娘の魂により此家を清淨にせんと祈られたが娘の死後は生前の誓を母親はだん〳〵破り約束がみな反古になるので其の弟は、姉さんは死んではゐないのにと悲んだのです。宣光は、私の片腕の樣であつた。或人が一燈園は論理的にはやれぬといふと、私はこれをやつて見るといひ兄さんが一燈園を行るなら私が宣光社を引受くるといふ風でした。カイゼルのものはカイゼルに返せ、肉體は親からのものゆゑ親の云ふ通りに、魂だけは光の許しは得る。世間を無視すれば、天國を成就することは出來ぬ。私は結婚に就て一つの理想がある。此の二人は世間の卽かず離れず、一燈園の結婚の參考品である。私は或る機會が來たら一基の比翼塚を建てるつもりです。此の戀愛はかくして完成されました。次は釋尼潤玉藤田お玉さんの事である。此の人は女で一燈園の建物を供養した人です、奥の床の間に掛けてある圖に一輪生に椿がさして有ります。あれはお玉さんの爲に、かゝれたものです。『人は謂ふ壺中の玩闕せず花自ら眞』と書いてある。こゝの建物程に使はれる、有益な建物はあるまい、死んだ人もさぞ滿足と思ふ。此の人は一燈園の緣に觸れてからは隨分節約した、そ

して托鉢の人がつかれると引取つてよく世話をせられた。つかれてやすみに行くと光榮としていたはつたほどの人です。私は此お玉さんの主人と連れであつたのでお玉さんの處へよく行きました。或時主人に來客で逢へず私は臺所でお玉さんと話してゐた。道の話であつたので、いつかしんみりしてゐたのを、主人が見て、怒られました。それで私はもう其の家へ行かぬ事にしましたが、お玉さんがこれから道を聽く事出來ぬとて、かなしまれるので、毎日家へ入らずに門口まで行きます。そしてお玉さんと其の二人の妹と女中さんと四人が一箸づゝの御飯をお皿にとつてあるそれを門口まで持つて來るが、お玉さんは、いつも顔はかくしてゐる。泣けて泣けてしかたがないといひます。そうするうちに、だん／＼善化して修業してゆかれました。そして家を建てさせてほしいと言はれました。普請中にちよつとお玉さんの氣持に不純なものが見えたので幾月も瓦を上げさせなんだ、見る人は笑ひました、あんな事をして材木が腐るといひましたが私は決して純なものでなければ手をつけまいと思ひました。しまひにお玉さんは、あやまつて來たので建てました。あんなものを建てまして御迷惑でしようと謙遜な言葉で挨拶せられました。懺悔して、あやまつて、あやまつて建てた建物、お玉さんの使用した金の內、これほどに淨められた使途はあるまい。又これ程開放せられた家もない。皆さんのお出になつて、居心地のよいのは、こゝに個々の生活の基礎を置く事がないから、たれもこゝに執着を持つものがないからです。次に新橋の小母さんとて、私の法喜の母です。嶽室隆貞禪定尼、といひ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ます。慾のない呑氣な人で此の建物の出來ない頃、六疊一室の此おばあさんの家が一燈園であつたのです。此のせまい處へ皆が集つてくつろいだのでした。私も此人にはいろ〳〵と厄介をかけました。こんな事で此人に一燈園のおくり名をしました。次に明眼不言居士、私の義理の弟で卯三郎といひました、眼が開いてゐて見えぬ樣になつたので妹達は心配して、自分の帶を賣つて其のお金で、どうぞ木の本のお地藏さんへお籠りをして下さいといふので卯三郎は眼の見えぬ事なぞに少しも執はれないので行く氣はないのですがあまり妹達が心配して賴むのでとうとう私に、兄さん行つてやりませうかと、いふ樣な事で籠られましたが、お寺の婆さんが眼の見えぬ事を知ると、地藏さんの一ばん前のところへ連れて行つて拜んで下さいやといふ、ところが後から人が來て一生懸命に地藏さんにお賴みするので少しあとへ退る、すると又お婆さんが來て、前へつれて行つて、しがみ付く樣にして地藏樣に賴めといふ此婆さんもなか〳〵親切な人なのです。ところがまたあとの人が前へ出て、一生懸命にお賴みする。すると卯三郎は、私の眼はどうでもよろしい、どうぞあの人の眼を癒してあげて下さいといつて又退がる。こんな風の人で、眼が見えず病氣して寢てゐながら、死ぬまで托鉢した人であります。少しでも暇があるとカンゼ縒をこさへたりしてゐました。病中寢汗をして一夜に五六度着物を更へるのですが、洗濯だけはして貰はれたが、世話をかけない、そして福田が多かつた。卯三郎が死んでから、お菓子の供養が少なくなつたといふ程でした。病氣しながら供養をされるだけの、受け

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

るだけの修業は出來てゐました。私は卯三郎を車にのせて引いて歩く心でゐました。卯三郎も亦私を大そう慕ひました。私が外へ出ると、心で私を待つてゐて、靜かに歸つて來ても二階で、お兄さんが歸つたと、いつもよく知つてゐました。正眼を開いて、病氣をしてゐたら、養はれぬ事はない。私はそれで特に自の見えぬ此人に明眼とおくつたのです。病氣になつてお光に惠まれぬやうな托鉢生活だつたら、其の人に祈りがないのである。私は卯三郎を情の爲に養はぬ彼は天と地の間に養はれるやうな資格をもつてゐた。お光の勘定を無視したら、おそろしい事になります。第一義の道には人情がない、此の人は雄辯に生活を體驗し終つた。次は、夏雲透石居士これは知つた方も大勢ゐられます私の二男理一郎であります。二十歲で死くなりました。私が旅に出てゐると電報が來る。又血をはいたと、すると私の講演は緊張するのでした。私はこんな歌を送りました『血を吐かば、はくにまかせてお光を、たゝへて歩め、わがゆく道を』。死ぬ三日程前に私が親しく死水をとりました。透石は死ぬまでお光の道を行つてくれましたから、私は長生きしてゐて呉れると思ふてゐます。高屋空然居士、此人は一燈園へ來るまでは大變不幸な人でありました。濟生病院に理一郎と同じ頃入院してゐました。適當な場所で落ちついて死なれました。小田芙蓉居士、賴造と言つて此の建物の出來た頃の人でまじめな人でありました。淨介院眞空無相居士、久保田政一とて、フランシスの研究の深い人でした。野原耕治居士、攝敎確信大姉、齋藤先生これは信州の方でした。野原さんも齋藤さんもお知りの

方があると思ひます。齋藤さんは謙遜に此生活に終られた方、高貞妙順大姉、順子さんさて妹尾さんの奥さんでした。密嚴院自覺妙理大姉はゴルドン夫人で長く一燈園を研究し共鳴してゐられた人です。此間亡くなられました等行居士、以上は一燈園の生活をし、關係の深い佛樣であります。

次に祭る人でありますが、祭る人といふはお互のこと全體であります。祭らるゝ人は、よい祭る人を得てしあはせである。私は平素人から頼まれる。色々の複雜なお仕事が多いので皆樣のせられてゐる樣な托鉢をあまりする機會がない、せめてお盆の中日一日でもさせて貰ひたいと思ひ昨年も法然院へ參りましたが今年も皆さんと一緒にお邪魔いたしました。お臺所の庭を掃き、お椽側をふき、皆さんの下駄を並べて見た、私はうれしかつた。それは一燈園の下駄は如何にも、そまつであります。盆はどんな下女下男でも、仕着で、きれいな下駄を穿く、皆さんの下駄を洗つて揃へて見ると、汚いのやら、ちんばのがある。下駄はちんばでもそれを喜んで穿く人の心は調ふてゐる。一つは緒が切れてテープで妙なくゝり方をしてある。まつすぐ並べて見たらよい氣持になりました。下駄と同じ樣に、廣袖の浴衣を着てゐる人、黑いのを着てゐる人いろ〳〵です。せめて夏は揃へたらと思ひますが、行屆かぬので皆さんは無雜作な姿をしてゐられる。世間では盆は休む時ですのに一燈園では、盆であるが故に大勢一緒に托鉢をする。頼まれるところへ身を渡し何も要求せぬ心に、樂しみを持ち、一緒に座つて經を讀むこれは一燈園でなければない事であります。私は皆樣によい祭る人を得て幸せ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

であると言ひましたが、佛様方に申します、一燈園の佛様は贅澤な祭られ方である。どんな立派な人が居るかもしれぬ。如何に立派な伽藍に祭られても、からだを賣つて經を讀む人に祭らるゝのとは違ふのです。佛様もほんとにおしあはせだと思ひます。私はかつて夏子が死ぬる前に申しました。あなたは幸である。たつた一人の人に經を讀むで貰うさへ幸はせであるのに、からだを捧げた大勢の人から經をよみまつらるゝと言ふて共によろこんだ事がありました。今晩はこれで有縁の佛様全部に回向させて貰うたかたちです。御めいめいの佛様へも供養として無相の祈りを、捧げました。お淨土でお喜び下さる事と思ひます。阿難尊者の親御が地獄に落ちてゐました。阿難は救ふと思ふて父母の爲に一心にお經をあげたがどうしても救はれぬので、お釋迦様にたづねますと、お釋迦様は、父母の爲にせず一切の爲に供養せよとのおさとしにそれから阿難は一切の爲に祈られますと父母が救はれました。全體を大切に全體への祈りは、やがて個々の完成になつて行くのであります。そしてそれが全體につながるのであります。人の汗を拭ひ人の爲に捧げる事が、極樂へ佛を送る事であると思ひます。

—一燈園に於ける天香師講話筆記—

義なきを義とす、様なきを様とす、淺きは深きなり、只南無阿彌陀佛と申せば、十惡も五逆も三寶滅盡の時の者も一期に一度も善心なき者も西東わきまへぬ者も決定して往生を遂げ候なり、釋迦彌陀を證とす。（法然上人が熊谷蓮生坊に致されし手紙）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

薊と菊（エヂンバラ印象記）

エヂンバラにて
岩橋武夫

（此れは當地の英字新聞に掲載すべく賴まれて書いた、私のエヂンバラ印象記であります。極く平面的なしかも輪郭の描寫に過ぎないもので、且つ外人本位に書いたものでありますから日本の讀者にとつては案外平凡なものであると思ひます。が然し別の見方からすると外人の爲に書いて其れを又日本人に讀んで貰ふことも一種のエキゾーチツクな興味であると思ひ飜譯した次第であります。）

『東より西へ』——世界半週の長い旅路を經た私達が最初の足跡をエヂンバラに印してから、早や一年の月日が過ぎた。エトランゼとしての盲た私と其の妻が、如何なる心持をもつて新らしい風土と未知の人々に接したかを想像して下さい。『旅を住家とし、旅に死す』と日本のある古い行ひすました詩人の一人が、其の心の日記『奥の細道』に書き遺したのも此の人生を旅其のものになぞらへ、其の旅に行脚し、飽迄生の本髓に徹しやうとする止み難き魂の衝動を傳へてゐる。旅を愛し旅に徹す——なんと云ふ愛着が其處にあることだらう。此の場合『旅』と云ふ語は、あながち形の上の慌しい移り動きをのみ指すとは思へない。急ぐにあらず、止まるにあらず、路傍に咲く一輪の花と自然の美を語

り、樹下緑陰に憩ふては今日逢つて明日別るべき異國の友とも、人生の永遠を語る愛と餘裕に滿ちた心を指示すものであつて欲しい。空を流れる雲、輝く太陽、靜かな渚、鳥の歌、かく天地萬物が此れ皆我が友、我が故鄕なりと云つた心の境地を實感するのでなくては、眞の旅を解したとは云へないだらう。此の意味からして、眞の旅人は或は己の故鄕以外に出て行かなかつたかも知れない。旅に出なかつたと云ふカントが、心の旅を辿つてゐた消息も其處にあるかも知れない。なんとなれば其處にこそ人生の象徴があるのであるから。時空と云ふ不可測の內に運命づけられた我々の謎が、透明に見えて來るのもかう云つた眞の旅心からでなければならない。有爲流轉の奧底に、不動の實在を捕へ得るのも、かう云つた旅人の目であらう。佛陀も旅をした。キリストもガリラヤ湖畔を巡歷した。多くの使徒や聖者等も、さうした人生を步んだ人達である。斯くして私の好きな表現を借らば『靜かなる動轉』とでも云ひたい樣な心持をひし〳〵と感じ乍ら、私はエヂンバラの生活を續けて來たのであつた。

今私は、遠くから日本の方を振り返つて見る。我が家に留守居する老ひたる兩親や弟妹、無心の愛兒、幾多の友人や知人、さう云つた人々が思ひ出の多い山野と共に、生き〳〵と記憶の內に戾つて來る。先づ私は日本の輪郭を、カンバスの上にスケッチしなければならない。一世紀以前迄は、東洋の一孤島に比較的圓かな封建の夢を微睡んでゐた當時と、今歐洲文化の擡頭せる潮の浪に洗はれて、百

般の人事文物が、目覺しい活氣を見せてゐる現狀とに驚く可き變化を經驗する。頭に髷を結び、大刀をたばさんでゐた『サムライ』の日本は、今既に列强に劣らない文明の所有者となつて仕舞つた。曉の鐘に呼び醒された若い民族は、かうして生き〳〵と世界の大舞臺に活動を始めてゐるのである。古い傳統と歷史とを持つた日本固有の文化は、歐洲近代の科學的發見と、秩序ある學問の大系とを受け容れることに依つて、斯くも稀有の進步を辿つて來たのであつた。だが私は、其の裏にあるものを見のがす譯に行かない——其れは軈て、近代の歐洲が苦しんでゐる同じ問題其のものであるから。歐洲の文化を受け容れた日本は、必然の結果として其の避け難き歸結に當面しつゝあるのである。あの潑剌たる日本が、青年らしい俤の底に、陰鬱な疑惑の陰をとゞめてゐるのも其の故である。物質生活の改善や、機械工業の進步に伴ひ、田園の美は徐々として煤煙の魔の手に侵されて行く。軍艦の數は增へるが、民衆の一般社會生活はいやが上にも逼迫して行く。惱しい階級鬪爭が、生活の苦を現實に見せつける。そして若い人々は、複雜な刺戟を喜び華かな道へ〳〵と憧れて行く。歐洲文明の持つ兩極端は、かうして日本にも際立つてくる日が來た。一方が明るくなればなる程、他の一方では暗澹と暗闇が增して行く。果して此の兩極端の最後は、如何なるものであらうか。機關車の轟き、空を翔る飛行機の怪鳥、ラディオの魔術などがすつかり日本を變へて仕舞つたが、其の一方、知りもしなかつた社會の暗黑面が暴露されて來る。此の憂ひと希望を一つにした若い日本を、私は氣遣はしげに眺める。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

そしては、其れを幾度か複雜にし大きくしたものが、軈て現代の歐洲其のもの丶姿である樣に思ふ。其れがまた、大英國の投げる全體の印象である樣にも感じられる。

本年春五月に勃發したコールストライキの問題は、かう云つた社會的持病が、如何に深い根底を持つてゐるかに就き我々に敎へて呉れる。其處から近代社會の側面に向かつて、解剖のメスが下されねばならない樣な氣がする。私は此の衆知の大問題を詳述しやうとするものではないが、たゞ一言書き添へて置きたいことがある。それは此の問題たるや、最早や炭坑業勞資間の問題にとゞまらずして、既に社會化し、國家化し、更に云へば世界化してゐることである。ロシヤに於て見せつけられたあの傷ましい革命の事實と共に、其れは將來の世界の上に大きな暗示力を持つてゐるからである。英國の國家が此の問題に對する處決如何は、世界各國の將來に大いなる影響を與へるからである。此の意味に於て私は、當局者と國民全體の、公正にして友誼に富める解決を曉望する。願はくば近代文化の步調を正し、人類共同の目的の爲に、今少しく立派な行動と解決を見せて欲しいものである。過去世界の歷史を通して我々は、餘りに心無き美名、誠意なき言動に欺かれ過ぎはしなかつたらうか。政治、學問、宗敎等に於て、餘りに言葉が多過ぎはしなかつたらうか。我々が若し心から眞善美を熱愛するならば、何故に其れを今少しくリアライズしなかつたのだらうか。何故に其れを先づ、己自身の裡に生きなかつたのだらうか。數字や機械に依つて人生を測定しやうとすることは、夢に依つて凡てを解決し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

やうとした古代人の其れよりも、更に大きな迷信であることに注意を向けねばならない。我々は問題を餘りにアイソラブルに取り扱つて來た。今少しく人生の合一目的に依つて、統一整理しなければならない。我々は本然の人間に立ち歸つて、更に高い見地から全體を見直さねばならない。眞の意味の『人生』と云ふ焦點から見るときに、全部の問題はアンアイソラブルとなる。雨後の明月の樣な純潔靜觀に立ち戻つて、人間一切を見るとき、複雜難解と見ゆる問題も、凡て自己の責任と懺悔の上に解決されて來るのではなからうか。キリストの敎へた人生の理想を、今少しく囚はれない氣持で考へ直すとき一切の解決の鍵は己の周圍、いや先づ己の裡に潜んでゐることに氣がつかざるを得ない。『天國は汝の內に在り』此の云ひならされた言葉の眞意義を『知る』のでなくて『悟る』のでなければならない。支那の聖者が『温古知新』と云つたが、キリストの深刻な敎訓は實に其れである。我々は囚はれた小さな主觀と云ふ偶像を毀たねばならない。地獄を作るのも我であれば、天國を作るのも我である。外的條件にのみストレスを置き過ぎて來た我々は、人生の目的を今一度內的なものに置き代へねばならない。そして生に對する爽かな喜びと、限り無き感激を新らたに創造し直さねばならない。もつと無條件を以て、今此の瞬間に於ける一切を肯定し、感謝しなければならない。魂の無い文化に天來の氣息を注ぎ入れる必要がある。嗚呼かうしてこそ、我々は近代人として、生活の搖がない地盤を得、人類共同の希望を持つことが出來るのである。朝を迎へ夕を送るに、我々はもつと深刻な意

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

義を持つてしたい。出來得るならば、其れをやむにやまれぬ衝動を持つてしたい。我々は心の底から、天地神明に對する感謝を忘れてはゐないだらうか。悲しむ者も惱む者も、悶える者も喜ぶ者も、共々に今在る銘々の存在に就て透徹して欲しい。私は勞働者の諸君、資本家の諸君、乃至は相爭ひつゝある人々や國々、一切の人類に向つて『嗚呼我が友よ』と呼びかけたい。そしてかう云ふ『さあ皆んなで、あの可愛い、子供等と爐邊で天國の話をする時の樣な、清い愛に滿ちた魂を甦へらせ樣。そしてお互が、同じ人間だと云ふことを心のどん底に感じ合ふ。其れで無くとも、多くの困難や不幸、病や死を持つてゐる弱い我々なんだから。お互同士の淺ましい爭ひをやめて、此の地上の生活をして、少しでも希望に滿ちた、明るい爭ひのない世界であらしめる爲、神に祈らうではないか。そして眞實人間の名に於て、お互の欠點を許し、隣人の愛を我々の中に實現しやうと誓ふではないか。朽ちる者の爲に憔悴しつゝある魂を救ひ出し、天國に寶を貯へ樣ではないか。多數は問題の解決者では無い。勇氣を以て、沈默の働き人とならう。さあ、皆んなの前に用意された畑がある、忍從と讃美の歌を持つて耕さう。』

日本の今は故人となつた或る作家が、武藏野の林に分け入つて秋の女神を嘆美しつゝ、かう書いてゐる『回顧し傾聽し瞑想す』武藏野の枯れた雜木林の代りに、此處には惠まれた自然と、人工の美に妙なる繪模樣を見せてゐるエヂンバラの街がある。其の中に座して、回顧し傾聽し瞑想するといつた

のが私である。過去一年のエヂンバラ生活を回想する時、私には恰も故郷の土を踏んだ時の樣な懷しさが偲ばれて來る。今は自分の問題へと、話を伴れ戾る適當な機會となつた。私が日本を立たうとしたとき、不在中に發刊される拙著に對し、序文を寄せよとの電報を發行書店から受取り、其れを船中にて認め、次の港から發送したものであつたが、其の序文中に私はかう書いた『……此等の光景は、此の旅を一區劃として新らしい人生の野に步み入る積りで居る私にとつて、何んと云ふ過去を思ふに相應しいものでありませう云々』實に今度の旅は色んな意味からして、私と妻の個人的生涯にとり、忘れ難いものである。私は其の書にミルトンの『サムソンの歎き』に用ひた闇の表現を借りて『動き行く墓場』と命名したのであつたが、今から振り返つて見ても、失明した當時の經驗は、實に例へ樣も無い陰刻なものである。何んと云つても私の生涯中、今度の旅行と失明との事件は、二つのエポック・メーキングスであらねばならない。カーライルの言葉を借れば、一つは『永遠の否定』の象徵として、沈默な暗い山となり聳へてゐる。他の一つは其處から『永遠の肯定』を象徵して、徐々に曙を歌ひ乍ら、緩慢なスロープとなり廣々と續いてゐる。あの生命の希望が、悲哀に滿ちた懊惱と絕望の底から、たゆる可くもあらぬ暗黑に、もう一度吾を投げかけて吳れた當時を、淚なしには回想する事が出來ない。私は拙著に『淚の中から力を求めた』と書いたが、實に其の力は、果敢的に生を肯定さして吳れた。其の力は、天地萬物を育てる神の不可思議な力であつた『石に拉がれた雜草が、いつか

は芽を吹き出す様に』私の生命も芽を吹いた。斯くして私は、其の生命をキリストの内に發見したのであつた。闇は光を齎した——何んと云ふパラドッキシカルであらう。然し事實さうであつた。そして私のみならず、私一家の全部が、思はぬ方向へと導びかれて行つたのである。人生は不可思議である。攝理の目は一切に透徹する。私と私との周圍には、悲しみの代りに喜びが、絶望の代りに希望の日が來た。私の新らしい宗教生活は、かうして魂の目を呼び醒し、人間と其の運命に就て、深い考察を指示して吳れた。闇は依然としてとり卷いてゐるもの丶、内部革命に勇み立つた私は、再び中絶してゐた學問の道を辿つた。讀むことも叶はない無限に歎いた書物が、今度は指頭から私のものとなつて來た。其れは何んと云ふ歡喜であつたらう。私は遂に暗闇を征服した。そしてもう一度目開き人の學校に戾つて、勉學する人となつた。同じ運命に訶まれたミルトンの作物を、好んで讀む樣になつたのも其の當時からである。卒業論文に其の詩人の『ソネット研究』を書いたのも忘れ難い喜びの一つであつた。芥子種程の信仰は、思はぬ結果を私に持つて來る。そして不可思議な力が、後から〳〵と私を押し進める。私は其のカレッヂを出てから、二年ばかり大阪の方で、同じ運命に惱む學生達を敎へてゐたが、其處からエヂンバラへ來る不思議な關係が、また私ならで周圍の人々に依つて、いや不思議な攝理に依つて、計畫されたのであつた。

無二の親友ゼ・エイ・ブレイルスフォード氏が、神戶ジャパン・クロニクルに赴任して來たのも、か

う云つた私の背景に於てゞあつた。エスペラントを語り、國際問題を論ずるに伴れて、樂しい心の一致が、私と彼の間に强い友愛を植ゑつけた。尙そればかりでなく、彼がクエーカーの信徒として、其の一家全部が信仰を生活に生きてゐる麗しさが、私をして彼に對する深い敬愛を拂はしめた。歐洲戰爭中は、キリストの敎へに從ひ武器を拒絕し、故郷ニユージーランドの牢獄に二年間監禁されたと云ふことも、私の心を强く捕へたものゝ一つである。私に最初の外遊を說き、其の後援を約束して吳れたのも此の友であつた。彼は、當地大學のチヅム敎授がコレスポンダントである關係上、同博士を通して、當地大學との交涉を一切とりまとめて吳れた。私の出身したカレッヂの外人敎授等及び其の他內外知人公私の友誼が更に其の計畫を確實なものとして吳れた。其の時また西田天香氏が、鈴木五郎氏や早大中桐敎授等と共に、敬虔な祈りの友として私の周圍に現はれた。其の人々の步まれる生活の道は、私の曾て追ひ求めてゐた其のものであると共に、尙敎へられる處甚だ多いものがあつた。(前記西田天香氏とは『一燈園』と云ふ日本の新らしい宗敎運動の創始者である。其の步みは、懺悔奉仕、地下水行を生活化し樣とする、眞摯な力强いものであるが、此の問題に就ては、別の機會に於て、論文を當地何れかの新聞雜誌に發表する考へである。尙私の妻も一度びは、同園に於て、求道し托鉢に從つてゐた事を書き記るす丈でも、どれ程此の運動と私との間に、深い關係が結ばられてゐるかを、想像されるに難くないと思ふ)兎に角、かうした一燈園の人々の眞劍な祈りと托鉢は、大いに私を力付け勵ま

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

して呉れた。ブレイルスフォード氏も私を介して、天香氏と肝膽相照すものがあつた。彼の書いた『日本の豫言者西田天香氏』と云ふ長い論文は、近くニユーヨークの『アジヤ』に於て發表されることゝ信ずる。尙最近日本新聞の報道に依ると、天香氏は目下ハワイやアメリカに於て講演中であると云ふから、近く歐洲に同氏を迎え得る日もあらうかと、今より待ち望んでゐる次第である。(續く)

鹿ケ谷より

◇天香師　いまだ布哇に御滯在、不相變講演に托鉢に接見に多忙を極めて居られますが、今や布哇全島を通じて一燈園は非常な問題となり、諸所に光の友の會ができ、ホノルヽ市には一燈園が生れて數名の同人が懺悔下座托鉢にいそしんでゐるそうで御座います。天香師はおそくも今月末には米大陸へ御渡航の筈であります。◇勝淳樣も御變りなくホノルヽの日本人病院を中心に御托鉢で御座いますが御疲勞のほどこそと拜察されます。

◇此頃鹿ケ谷裏山の紅葉は樹の間を覗いて私等に笑みを送つてゐる。散りゆく葉さへ靜かに落ちてしつくり秋の趣を彩りました。玄關前のサンショの根本に誰がさしてか黃菊一本此頃咲いてしほらしく氣高いのも喜びの一つです。◇十月廿六日には在京兄姉二十二名で龜岡から保津川下りを催しました。◇十一月一日には朝まだきより南禪寺山內の御掃除に集團托鉢しました。

論語講話

安藤州一

今回一燈園に於て、新しき試みとして講話會を開き、心性開發の一端と爲さんため、去年十二月廿三日の夜、烏丸頭なる燈影小塾に安藤州一師を招聘し、論議の講話を拜聽せり。此日は園員一同早く托鉢を切り上げ、七時頃には男女五十人許り集りたり。東京より歸り來りし天香師夫妻も園員と共に膝を並べ、熱心に傾聽せられたり。黑板も椅子も俄かに借り來りて席を作る、講話一時三十分間許なりしが、各自熱心に聽講し、說く者聽く者共に我を忘れ、室內寂として心を障る者なく、たゞ鼎聲の靜かに松風を送るあるのみ。此夜、微雲淡月、小雨晴れて星光寒空に輝やけり。九時を過 る頃、各自鹿ケ谷の本園に歸り去りぬ、講話の大要を此に記るしぬ。(記者)

微雲淡月、天冷み星輝きて、人の心も自から寂寞の氣分にひかれ、動もすれば悲觀にも傾き易い時節に、かやうな集會を催ふし、心の奥の光りを尋ね、春に先ちて胸裏の春風に逢はんとするは、まことに結構なる催しであります。今晚私の御話しいたす事は、論語の首章の話しであります、論語といふ書物は、まことに人生に缺く可らざる大事の書物で、伊藤仁齋先生は、宇宙間第一の書と稱讃いたしました。仁齋の意見は、『論語古義』の中に著はれて居ますが、今はそんな事は略して置きます。

學問さで論語をよむのは、學問は學問であるが、世間普通の學問とは一寸趣きを異にして居ます。學問と云へば、大抵文字に關しますが、論語は文字としては誠に斷片的に言ひ顯はされてありますが、その精神に至つては、論語二十篇の中に、一貫した生命が流れて居ります。そこで今晚私が話す論語は、

文字の論語でなくて、無字の論語であり、生命の論語であります。本文は印刷に附して各自の御手元に渡してありますが、その本文を見る必要のある人は見るもよいが、必ずしもそれを讀む必要もないのです。私の話す精神が、私の言語によつて、諸君の心に通ふたなら、それで論語をよんだ事になるのです。

むかし印度に一人の貧女が、やつれた姿をして道を歩んで居ると、其女の素性をよく知つた人が申すには、あなたの兩親は、あなたの身の上を案じて、多くの金銀珠玉の寶を集め、大きな甕に入れて地中に埋めてある筈です、あなたは他所を迷ふて居らずと、家に歸りて庭の中を掘つて見なさい、必らず富貴になられます。と敎へて吳れたので、彼女はその人の言に從ひ、家に歸つて庭を掘ると、果して金銀珠玉を以て滿された大きな甕を發見したので、遂に富貴の身分に成つたと申す事でありま す。「植えて見よ花の開かぬ里はなし心からこそ身はいやしけれ」とかいふ歌もありますが、心の地中をほつて見て、金銀珠玉のみちたる甕の在所を尋ぬるといふは、まことに賢明な事であります。私が論語の話しを餘り精しくいたしますと、諸君の代りに私が鋤を取て掘る事になります、それでは今夕の會合の意味が薄くなる事になります。鋤は皆さんの手にあります、甕は皆さんの心の中に埋められてあります、故にそれを掘り出す努力は、皆さんの反省修養に待たねばなりませぬ。私の話は、甕がどの邊に在るといふ位な大體の話しに過ぎませぬ。

論語に一貫したる精神は何であるかといふ事は、多くの學者に由て種々の說が唱へられます、伊藤

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

仁齋先生は、論語一篇は、「學を好む」といふ事を明したものであると申しますが、廣瀬淡窓先生は、論語一篇は、「君子に成るの道を明かす」と申されました。これは皆その人〳〵の性格から見た意見であるから、どれが善いの、どれが惡いのと言ふ事はありません、みな其人に取ては眞實の生命を持て居ります。仁齋先生が嘗て申されるには、自分は生れつきが魯鈍（おろか）で、何事も人については行けぬ、ただ學を好むの一事は敢て聖人に讓らぬ、花を見るも月を見るも、芝居を見るも世間話しを聞くも、一として學問の資料（たすけ）でないものはない、立つも坐るも凡てが學問である、故に學を好むの一事は何人にも讓らぬと。こんな御精神の人が論語をよむと、いかにも論語は學を好むの道を明したものであると見えるでせう。孔子御自身も、「丘か學を好むに如かざるなり」と仰せられ、また「顏回なる者あり學を好む」と申されました。こんな氣分で論語をよんで行くと、いかにも論語一篇は、學を好むの御話しばかりです。淡窓先生は自己修錬といふことを好まれた御方で、御自身も四十五六歳頃から『自新錄』といふ著述をいたし、自分の功過を驗（ため）して記るし留めて、反省の資料（たすけ）にいたされた人であるから、論語一篇を、君子となるの道を明かしたと言はれるのも尤もな事であります。論語の初めに、「人知らずして慍（いきどほ）らず、また君子ならずや」とあり、論語の終りには、「命を知らずんば以て君子となさず」と仰せられて、天命に安んずるの大切な事を話されてあります。また進退宜しきに從ふ所をほめて、「君子なるかな遽伯玉（きよはくぎよく）」と仰せられた所もあります。人格を磨き上げることを好む淡窓先生が、論語一篇は、君子となるの道を明した者であると見られたのも又尤もな事であります。私は仁齋や淡窓より外に、別に意見を立てゝ見たいのです。それは論語一部は、「人生を樂しむ」といふ事を示さ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

れたものと言ひたいのです。私は苦しむ事は堪へられぬ、惱ましい生活は嫌いです。いかにかして悠然と樂しむ生活を送りたい。多分自分が苦痛に堪ふる强さを持たぬ所から、こんな希望も起るのでせう。然らばいかにして樂しむことが出來るかと言へば、やはり論語に示された道に從ふのです。孔子が「發憤して食を忘れ、樂んで憂を忘る」と仰せられ、「君子は憂へず懼れず」などの處を見ますと、いかにも論語一部は、心の樂しむことを示されたのかと思ひます。陽明先生が、「心の本體は樂しむ」と申されます。然るに私共の心が樂しまぬといふは、妄念のために心の本體を見失ふて居るからであると存じます。そうして見ると、苦惱は心の本體から起るのでは無くて、本體を見失ふた所から起る者と見えます。無住禪師の歌に、「足なくて雲の奔るもあやしきに何をふまへて霞たつらむ」といふのがあります。足が無くて雲が奔り、ふまへる土臺がなくて霞の立つのと同じやうに、私共の妄念は、正しき理由もないのに、無暗矢たらに起る者と見えます。若し此妄念を離るゝことが出來るならば、人はいかに幸福でありませうか。たとひ離るゝ事は出來ずとも、少なくする事が出來れば非常な喜び事であります。今晩は論語の初めの一章を話します。

子曰く、學んで時にこれを習ふ、亦説ばしからずや。朋有り遠方より來る、亦樂しからずや。人知らずして慍らず、亦君子ならずや。

この一章は論語二十篇の卷頭第一に置かれてあります。識者これを小論説と喚びます。論語二十篇は、この一章の中に納まると言ふ意味である。仁齋先生が、論語一部は、學を好むの道を説くと謂はれましたが、最初に學んで時にこれを實行するのが、中心の説びであるとありますから、仁齋先生の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

御說の意味が充分に見えます。されど人が自分を知らなくても、ひとり自ら說んで、慍らぬ處が君子であると言ふのを見ると、淡窓先生の、論語一篇は君子の道を敎へたものと見られたのも、また尤もであります。されど此首章の中、說ぶと言ひ、樂しむと言ひ、慍らずともあるから、私が言ふ所の、論語一篇は、人生を樂しむ道を示したものと見るも差支へはないやうであります。渴く人は水を求める、寒へる人は火を喜ぶ、私が論語を以て、人生を樂しむの書と見るのは、それだけ私の心中に妄雲か起り、惱みか生ずるからでもありませう。仁齋先生も淡窓先生も、御說は變つて居るやうですが、內實はあまり變つて居らぬ。たゞ少し色彩の異なるのは、其人の箇性の相違に由る事と思ひます。君子といふ事を一言說明いたしますが、古い所では、詩經の初めに君子の語が出て居ります、德ある人を貴んで名けたもので、英國のレッグ氏は哲人と譯し、傳敎大師は、「西に菩薩と言ひ、東に君子と言ふ」と仰せられてあるそうですから、これで大略君子の內容も分ることであります。私の友達に、この論語の首章を、佛敎の用語をかりて、自覺、覺他、覺行圓滿の三つに配當した人がありました。善導大師か佛といふ言語を釋して、佛とは是れ西國の正音、漢土に覺と譯す。さとるといふこと、自から覺ると、他人を覺らしむると、この二行が圓滿して、覺行圓滿に至るとの、三つに分けることが出來るとの意であります。初めの自から學んで說ぶは自覺、次の朋友と道を語つて樂しむは覺他、人知らずして慍らざるに至つて、始めて覺行圓滿することか出來たと見るのである。この見方もなか〳〵面白い。話しが少し餘所に轉じますが、他人はなか〳〵自分を了解して吳れる者ではない。眞に我れを知て吳れる人が、世間に一人でもあるならば、その人は幸福な人である。劉備の孔明を知

り、蕭何が韓信を知るが如きが、人を知るに近き者でありませう。自分の履歴や貧富のみを知つた人を、我れを知つたとは申されませぬ。知識の理解と感情の理解とは相違がある。我れの善い所を知つた上に、悪い所も知りながら、それをゆるして、まことに氣の毒である、何とか慰めてやりたいと言ふ心地の人が、ほんとうに自分を知つて呉れた人である。かやうに知るのは、知識では行かぬ、感情で知るのである。熊澤蕃山が芳野山に入て、「この春は芳野の山のやまもりとなりてこそ知れ花の心を」と歌ふたやうに、花になり切て花を知り、其人になりきつて始めて其人を理解することが出來るのである。子貢が孔子に對して、「一言にして終身これを行ふべきものありや」と尋ねしに、孔子は「其れ恕か」と御答へになりました。恕は普通に思ひやると解するやうであります。人知らずして慍らざる處には、自から信ずる強さもありますが、我れをそしる人も、其心が苦しいからであるわいと、そしる人の心中も察して、「人知らずして慍らず、また君子たらずや」の氣分を味ふて行きたい、程子が、論語を讀む人にも色々の種類があるが、讀み了つて、手の舞ひ足の蹈むを知らざる者ありと申されましたが、私は程子の言はれた言語や、仁齋の言はれた、論語は宇宙間第一の書であるとの意味が少し了解し得たやうに感じます。今晩はこれでとめて置きます。

●本號表紙題字は　一茶翁の筆蹟からいたゞきました。本月は翁歿一百年忌にあたるさいふことであります。

道友

松下吉衞

杉本、道お求めあぐんでいる男、三十八歳。
野中、天理教々師、三十一歳。

M驛にて電車おまつ間。

杉本『こんなにあなたおひきまわして、……ほんとにおそれいります。』
野中『いゝえ、毎日お道のことでそちこちしているのですから。』
杉本『私のようなものゝために、こんなに時間おおつぶしねがつてわ、すまないと思うのですが、この間からなぜかしきりにおあいしたかつたものですから……』
野中『まだ私など、から未熟で、そんなにおつしあられますと、おはずかしいです。』
杉本『…………そんなわけで、私の宗教生活わ、年月からいえば、みじかくわないのですが、下座奉仕おしていれば、お光りがおがめる、安心立命ができる、とゆうように、結果お豫想する心が、どうしてもとれないのです。たま〳〵人によろこばれでもすると、つい、いゝ氣になり、自分の心で、都合のよさそうな材料およせあつめて、我れと我が佛お

つくりあげてこれお本ものだと思いこんでいたのでしよう。ことばでわ、わがはからいおやめなくてわ、とゆうことわ、きゝすぎるくらいきいており、自分も何かの折など、人に度々いゝさえしたことがあるのですが、自分自身、そのあやまちに、はまりこんでしまつていることにわ、非常な出來事にでもあつて、心のどんぞこからおどろきませんと、私のようなものわ、氣ずかずにとおつてしまいがちなのでして……』

野中『いや、お互さまです。』

杉本『考えると、はずかしくつて全くおはなしにも何にもなりません。よくもこう長い年月の間――學校お出た翌々年からですもの――師友のたれかれに、ずいぶんおせわになりながら、まよいこんできたもので、みなさんに面目次第もありません。そうふまじめにくらしたわけでもなく、私のわ、どちらかとゆうと、まのあたりのことにこの全身おうちこむといつたようなたちでして、修行も本氣でさせてもらつたのですが、業がふかいものか、今日のようなていたらくなのです。』

野中『私もクリスト敎で七年間もさんざんなやみました。あなたお私におひきあわせくださつた木澤――私の從兄ですが、私わあの從兄に偶然さそわれたのが緣で、今のお道にはいらせてもらつたのでのした。………

電車きたる、兩人乘車。

野中『このお道にはいつたら、クリスト敎のこ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

とも、ほんとにわからせてもらつたように感じました。ふしぎですね。お道にわあつて、今のクリスト教にハッキリ出てないところもあるようです、たとえば、因縁のしらべや、病のふしぎなお助けなどですね。』

杉本『そうですか。』

野中『あなたもご存知の、あの藤間さんのお姉さんのご病氣ですね、因縁のしらべがついて、さんげしてもらいましたら、奇蹟的によくなつてつています。何でも赤十字病院で手術していかず、H病院で見はなされていたのだそうですね。病院えはじめてうかゞつた時、おどろきましたよ、痛みおしずめる注射で、兩方の腕がコチ〳〵なのです。病氣わ腸がねじれるかして大へんいたむのだそうですが、もうこの上、何とも手のつけようがなく、本人もまわりのものも、もうあきらめてしまつていました。そうゆう床がえりも一人でわできない容態の病人お、自動車で病院からつれて出て、何にも醫療お加えませんのに、數日しましたら、もう患部のいたみわとうに去つて、そろ〳〵今わ歩けるとゆうのですから、皆さんおどろいていらつしあいます。』

杉本『いわゆる心靈療法とわちがうのでしょうね。』

野中『私わたゞ神さまのおさとしお取次がせてもらつて、本人さんに心ずかいの天理にそむいていたことお、眞におわびしていたゞくだけなのです。人間に何おごうするつて力もありません。きたない罪のかたまりですもの。私

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

わ病人にお道のご縁おむすばせていたゞく場合にも、神さまに病氣おなおしてくださいとわ、おねがい申しません。それわ人間の分おこえたことで、おそれおゝいと思います。人間の分としてわ、ごりやくがあるとかないとかゆうそろばんおはなれて、たゞ眞に心からおわびするだけしか、ゆるされないのでわありますまいか。病氣のなおるなおらぬわ、全く神さままかせです。神さまわ親さまですから、わるいようになさるはずわないと信じております。』

杉本『そこまでいかなければ、ほんとうでありませんね。………あッ新宿ですね、どうぞおのりかえお………』

兩人のりかえ。

杉本『こゝでまたおおりねがいます。』

兩人S驛にて下車。

杉本『私、K病院で、ちよつと用事おたしてまいりますから、失禮ですが、少々おまちくださいませ。』

野中『どうぞごゆつくり。』

杉本、間もなくもどつてくる。

杉本『大へん失禮しました。實わ父親がこゝにかゝつていますので………』

野中『そうですか、どんなご容態なのです?』

杉本『ガンのようでして………私の信仰がぐらついてるものですから、ほんとうの孝養ができず、こまつています。』

野中『それわご心配ですね。』

杉本『……おそれいりますが、父親におあいくださいませんか、近くいなかゝら出てまいるはずですから。』

野中『えゝ、私でまにあいますなら。』

杉本『あの、これから外苑おつきつて、その邊でおひるおいたゞかせてもらいましようか。』

野中『どうぞ。』

外苑の中、神宮競技あるらしく拍手さきのこえきこゆ。

杉本『こんないゝ日にこうゆうところお歩きながら、道の話おうかゞえるなんて、よほどめぐまれているのですね。それだのに、格別よろこべないなんて、私わ、よく〱のばちあたりだと思いますよ。……どうしてかこのごろ心がはれないのです。』

野中『あなたわ、求道心にわざわいされておいでゞわないのでしようか、そんなふうに思われますが。』

杉本『…………そうです。……そうでしたね。いつもこれでいけないのです。わがはからいわすまい、こんなやくざものだ、世間的ののぞみなどすべてすてよう、神さまに何もかもおまかせする外ないと、とうに覺悟わきめてしまつているはずでありながら、やはり自分で自分の力で道お求めようとあせりきつているのですね。全く、しようがない……いつも私わこれでいけないのです。……』

野中『道わ、ひくいむなしい心におのずと與えられるものだと思われます。我が力おはたら

かせて道お求める心くらい人間の分おわすれた大きい我慾わありますまい。名利の慾など、これにくらぶれば、むしろ、罪のかるい方でしよう、極端ないゝようですが。』

杉本『ほんとうですね。りくつでわかっていながら、どうもそこがいやにこだわつていて私わいけないのです。よつぽど、業がふかいのでしよう。』

野中『私がそうでした。工科おやつたくらいでして、根がりくつつぽくできているものですから、神さまの特別なご守護で、この前おきゝにいれたような靈的體驗おさせられませんでしたら、今もすうつと苦しみつずけでしたろう。』

杉本『求道心おすてよ！わ、ありがたい御注意でした。はたからおつしあつていたゞきませんと、やはり氣ずかないものでして。……あゝ、その邊で何かいたゞかせてもらいましようか。パンわいかゞです。』

野中『えゝ、けつこうですとも。』

ミルクホールの中、食パンが一人前しかないとゆうので兩人分ちくらう。

野中『こうしてお話お申上げていますと、こゝがこのまゝ教會だとゆう氣がいたします。』

杉本『全くですね。』

野中『私わどちらかといえば、外えださせてもらう方が多いので、ほんとうの教會わ路頭にあるとゆう實感およくいただかせられます、むろん教會無用論者でわありませんが。』

杉本『つつこんだおたずねですが、あなたの生

活費わどうなつていらつしあるんですか。』
野中『全く神さままかせにしています。妻も一所に教會で働かせてもらつていますが、月給その他きまつた收入とゆうものわ少しもありません。なくてならないものお、そのつど、教會からいたゞかせてもらつているだけです。ふれた方々からお供えお受けることがありますが、そのまゝ、それわ、神さまにさゝげさせてもらいます。』
杉本『ありがたいご生活ですね。』
野中『えゝ、もつたいないと思います。こうして貯えもなく收入もなしにくらしていまして、何の不自由も不安も問題もありませんのです。一日々々が一生のような氣がいたします。………考えると人生つて皮肉なものですね、私わ、以前、醫者と坊主ぐらいきらいなものわありませんでしたが、そのきらいな兩方おかねたような生活お今させられているのですから。時々、おかしくなりますよ。』
杉本『なるほどね。…………これから、私、下町の方にいかねばならないのですが……』
野中『よろしうございます、お供させてもらいます』
杉本『はんとにおそれいります。』

電車の車掌臺にて。

杉本『世の中にわいろ〳〵の教がありましても、結局のところわ同じだと思われますが、人にわ各かたがあつて、甲の人にわ甲のかたの教、乙の人にわ乙のかたの教おとおらなく

てわ、信仰にはいりずらいものでわないでしようか。』

野中『そうかもしれません。』

杉本『あなたわ、クリスト敎でおちつけず天理敎に救われなさつたとおつしあいますが、眞宗でほんとうの安心がいたゞけないでクリスト敎にふれて信仰にはいられた方お、私わ先輩にもつています。………私など、旣成宗敎のどれにもよらず、諸宗の眞髓お禮拜し歸一の大願に參ずるとゆうようなお導きお十年あまりもうけてまいつたのですが、性格が物お扱うのに理知にこだわるとゆうふうで、それに少しも獨創的なところがないためか、これでわ、どうも、信仰のことが、知解的に上すべりおしてしまつて、中味にふれられませんのです。私のようなこうゆうやくざなかたに生まれつたいものわ、やつぱり、先覺者のたれておいてくださつた、それ相應な敎に、めぐりあうのでなければ、助けられないのでわないかと、この頃つくずく考えさせられております。どうした因緣か、こんど、木澤さんのご親切から、あなたにあわせていたゞいて、お說きくださる敎おすなおに頂だいできますのわ、私がこうした心になつてきていて、敎のなかに自分のかたにあつてるふしが大分感ぜられるからでありましよう。』

野中『ありがとうございます。一燈園の下座奉仕の行わ、實にお見上げ申したものなのですから、信仰があなたにおいたゞけになつたら、ほんとうに大盤石の上の家でございま

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

すよ。』

杉本『とにかく、私わ、これまでだけの修行法でわ、事實、浮ばれませんでしたから、こうゆうふつゝかものにふさわしい道で信仰にはいらせてもらつて、そして一燈園の行願に許されるかぎりそえたい覺悟でいます。』

野中『けつこうです。』

杉本『私の今の氣持わ、實に妙でして…………どういゝあらわしたらよいか……苦しいにわ苦しいが、そういてもたつてもいられないとゆうほどひどくわないのです、こうして頼まれた用事もたして歩けているのですから。……そうですね、見たところわ、うすくつて、ちよつとつつけば、じきにも破れそうに思われながら、金あみのような強さがあり、向うがぼんやりいくらかすきとおつて見えるようでもあるが、近よつていくら目おすえてながめいつても、何一つ物の形わはつきりしないとゆうような鉛色の幕！　こんな幕にぐるりがはりつめられている、限られた場所に、右し左しゝてあてどなく出口おさがしあぐんでたゝずんでいる疲れ氣味の旅人とでもいつたら、幾分この氣持お想像していたゞけるかしれません。こんななんですから、私の夜あけわ、いつですやら。このうすくらがりが、夕暮のうすくらがりであつて、これからますく／＼くらさが加わつて、全くの暗夜につながるのでわ、みじめです。…………あつ、こゝでおゝりください。』

H停留場で下車、問屋店のつらなる下町通およぎりつゝ、語る。

野中『神さまに、もう何もかもおまかせするのですね。』

杉本『えゝ、そうにちがいないのですが……おまかせすると決心したことゝ、事實がおまかせしたことになつているのとわ、ちがいましてね！ それで私のような小智のはたらきのやまらん變にかたくなゝたちわ全くまいらせられます。』

野中『そのご氣持わ、私にもよくわかりますですが、因縁がきれなければ、人間の力でわ、どうともならないことでして……私共わ、さんげ一條になつてくらす外ないのでしよう。』

杉本『そのとおりですね。何一つ徹底して小さな善いことすらできない身ですもの。……私、この店でちよつと用事おたしてまいりますから、しばらくおひかえくださいませ。』

二十分ほどして店から杉本いでくる。

杉本『おまたせ申しました。この少し先にもう一軒よらせていたゞく家があるのです。度々ですみません。』

野中『どうぞごえんりよなく。』

杉本『實業方面にふれて世相おながめますと、あまりけわしくつて、私など、とてもよりつけもしないとゆう氣がいたします。こんなに、以前わ、やくざでなかつたし、また、このまゝでわ、しかたがありますまいが、今わ

からよわい氣にばかりなつてしまつていますのです、どうしたわけなのですか。』

野中『とにかく、一度、世間との交渉お、できるだけ單純化して、信仰一すの生活につかれるのがよくわありませんか、後わ後として。』

杉本『私もそのように思われますものですから、先頃からいろ〳〵整理にかゝつております。』

野中『それわけつこうです。』

杉本『……でわ、また少々おまちお……』

野中『どうぞごゆつくり。』

半時ばかりして杉本でてくる。

杉本『おまたせ申しました。すみません。……これから私わU驛の方えまいるわけになつているのですが、あなたの御都合わ?』

野中『そうですね、本郷のS町にまわりたいと存じますから、途中までお供しましよう。』

杉本『おそれいります、今日わほとんど一日中、そちこち自分の都合のよい場所々々えご苦勞かけまして……』

野中『少し歩かせてもらいましようか、停留場お二つか三つの間、もしお急ぎでなければ。』

杉本『どうぞ』

野中『私で間にあいますなら、ご都合のいゝところえうかゞいますから、いつでもそうおつしあつて。』

杉本『ありがとうございます。よろしくお願いします。お助けおえないと、自分だけでわ、とてもだめなのですから。』

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

野中『生活お單純化して一元的にとゝのえて、足もとの一番近いところの事柄お忠實にやつていく。——皆さんがこうなさればいゝのでわないでしようか。』

杉本『全くですね。』

野中『以前とて、私わそう大してやゝこしいおごつた生活おしていたわけでわありませんが、この頃ひとりでに生活が非常に單純になつてまいりましたのにわ、自分でも意外に感じているくらいです。自分のための仕事とゆうものが全然なくなつたためかと思います。』

杉本『けつこうです。』

野中『氣持もからつとしていまして、思いわずらうとゆうことが更にありません。仕事わ、それで、一生けんめいにできます、すべて、であいがしらですけれど。』

杉本『なるほどね。』

野中『死に生きについても、考えがまるきりかわつてまいりました。死ぬのわなくなるんじあない、ところがかわるばかりだとゆう實感がわいてきています。昨年ひとりしかない三つになる女の子がめされた時も、いわゆる悲嘆にくれるとゆうようなことわ、夫婦ともありませんでした。』

杉本『なるほどね。』

野中『おかげで、さびしいとか不安とかゆうことも感じません。業のふかいものが、こんなにして行けてわ、めぐまれすぎると思つています。』

杉本『ありがたい境涯ですね。』

野中『よくお經などに極樂のかぐわしい風光がえがいてありますが、時折、こゝのところおゆうてるのでわないかなどゝ感じさせられることもございます。』

杉本『ほんとうにけつこうですね。』

野中『うつくしい方面ばかり申せば、こうですが、みにくいはずかしいことも、むろん、澤山ございまして、お手いれおよくうけますです。』

杉本『お手いれと申しますと？』

野中『私のわ體に何かさわりがおきるのです。そうゆうとき、おちついて考えさせてもらつていますと、心ずかいのあやまちがわかつてまいります。それおさんげさせてもらいますと、きたいに病氣のおなおしがいたゞけます。』

杉本『なるほどね。』

野中『……あゝ、S町ですね。こゝからおのりになるのでわありませんか。』

杉本『えゝ……。』

野中『でわ、失禮いたします。どうぞお大事に。』

杉本『どうもありがとうございました。とうとい時間お、こんなにおさきねがいまして……失禮いたします。』

—大正十五年十一月—

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

黎明のさゝやき

西田天香著　代價30錢

近代文化と一燈園生活

,,　,,

一燈園生活問答

松下吉衛著　代價15錢

時代苦を苦しむ

,,　代價20錢

クリスト教社會主義史

,,　代價32錢

社會問題と宗教

中桐確太郎著　近刊

購讀申込所

回光社

京都市烏丸頭下總町五

振替 大阪 59839・東京 57671

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

大正十二年十二月二十四日第三種郵便物認可 毎月一回十五日發行
大正十五年十一月廿二日印刷納本 大正十五年十一月廿五日發行

「光」第五十八輯 代價貳拾錢

ホルムス氏原著・谷口雅春氏譯

第一篇 忽四版

如何にせば運命を支配し得るか

四六版 總洋布綴 三百數十頁 定價二圓

第二篇 最新刊

神と偕に生くる道

四六版 背洋布綴 三百數十頁 定價二圓

譯者の三部作『神を審判く』はその第一部を出したのみで未だに第二部が出ない。それは氏の心境が既に『神を審判く』時代を去つたからである。氏は今自己を『神と偕に生くる道』に見出したのだ。此の心境の推移を語るものは此のホルムスの二名著の飜譯である。『それは譯書であるけれども自分のどの著書よりも自分の現在の心境に近い。自分は此の書によつて救はれ、又此の書によつて他を救はんがためにそれを譯したのである』と。

（本書の反響の1）

◇本書を手にせる日より一日として讀まざる日なく精讀八回つひに境遇を一變致候（兵庫縣六甲村、石田醫學士）

◇在來教會と寺院とにのみ障取れる宗教を實際生活に體現せる眞に生きた宗教と存候（橫濱千草園、本田氏）

◇私たちの衰へひがんだ心にも大なる光が與へられます。數年前に此の書を手にせしならばと愚痴さへも起ります（廣島縣安佐郡、藤木氏）

第一篇 發行所 東京京橋南紺屋町（振替東京三二六） 實業之日本社

第二篇 發行所 東京市京橋尾張町（振替東京五五三） 警醒社書店

發行兼印刷人 京都市烏丸通[illegible]
發行所 [illegible]

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN